

ADB、2007、2008年のインド経済の成長率を上方 修正

[マニラ、2007年9月17日] アジア開発銀行（ADB）は、本年春に発表した「アジア開発展望（Asian Development Outlook）2007年版」の半期後の見直しである「[アジア開発展望（ADO）2007年改訂版](#)」を発表した。それによると、インド経済は、堅調な投資、産業の拡大、および農業の緩やかな成長に支えられ、2007年から2008年にかけてしっかりした成長を続けると見込まれる。

具体的には、当初2007年が8.0%、2008年が8.3%と見込まれたインドの成長率は、ともに8.5%に上方修正された。会計年度ベースの成長率でみると、2006年度（2006年4月～2007年3月）は9.4%という、18年ぶりの驚くべき高成長を記録している。

その一方で、報告書は、インフレリスクが根強く残っている点、食料価格が打撃を受けた場合に物価上昇圧力に発展しかねない点を指摘。このうちインフレ率について、2007年度、2008年度の卸売価格指数はともに5%にとどまると予測している。

ADBのチーフ・エコノミスト、[イフサル・アリ](#)はインド経済について、「より高い成長路線へとシフトしたが、政策決定者にとっては、市場志向経済への改革をいかに進めれば全ての国民に恩恵がいきわたるかを模索することが、大きな課題となるだろう」と述べている。

インドでは、成長が加速する一方で、キャパシティ面にボトルネックがあることから、物価上昇圧力が高まっているほか、輸入食料品の価格も急騰している。またインドは、国際石油価格の影響にはまださらされていない。

お問合せ先

駐日代表事務所

広報担当：望月 章子

T: +81 3 3504-3441/3160

E-mail: amochizuki@adb.org

ADBのニュースリリース（和文）は、下記URLにてご覧いただけます。

<http://www.adb.org/JRO/doc-news.asp>

報告書は、インド中央銀行について、輸出及び投資の需要を支えるような与信・金利の環境を確保しつつ、インフレ圧力をうまく抑え込んでいると指摘。

アリ氏は「高金利にもかかわらずインドの設備投資が落ち込まなかったのは、長期経済見通しがきわめて好調で、借入れコストの上昇サイクルを上回っているため」と説明している。

しかし、金利が上がれば消費者心理が冷え込み、耐久財の需要が鈍化したり、建設事業のペースが減速することも想定されよう。

今次報告書は、輸入について、国際石油価格が強含みであるため当初の予想より早く伸びるとしており、経常赤字については対GDP比で2007年が1.6%、2008年が1.9%程度とみている。

報告書はまた、インド経済に対する今後のリスク要因として、財政・金融の規律が損なわれたり、食料品や燃料の価格に悪影響を及ぼす事態が生じた場合を挙げている。ルピー高がより進んだ場合も輸出に打撃を与えることとなり、関連企業の利潤は頭打ちとなろう。更に、金融市場における混乱が世界経済に波及する可能性については、インドも例外ではない。だがその場合は、政策面や、力強い内需、財政の健全性といった点で調整の余地があるだろう。

お問い合わせ先

駐日代表事務所

広報担当：望月 章子

T: +81 3 3504-3441/3160

E-mail: amochizuki@adb.org

ADBのニュースリリース（和文）は、下記URLにてご覧いただけます。

<http://www.adb.org/JRO/doc-news.asp>